

《第460回（2019年2月14日）子どもの本の読書会記録》 参加者：7人 文書参加：2人

時間：10:00～11:30 場所：オーテピア4階集会室

『メッセンジャー 緑の森の使者』 『ある子ども』

ロイス・ローリー/著 島津やよい/訳 新評論

今月の課題図書は、先月に引き続いで＜ギヴァー4部作＞の後半です。

『メッセンジャー』では、2作目で登場したやんちゃ坊主のマットが、マティと名前を変え、立派な成長を遂げて再登場します。マティが移住した新しい村は、よそから排除されたり逃げてきたりした人たちを受容し育ってきた相互扶助社会です。しかし、村の古い風習「トレード・マーケット」に生まれたある小さな異変が、住民たちを変化させていきます。博愛的だった人々の心は徐々に利己主義へ転向し、やがて、新参者の受け入れを拒むために村の境界の閉鎖が決定します。境界が閉じられる前に、よそのコミュニティに住む親友を連れ帰るため、マティは深い森の中に一人飛び込んでいくのです。

シリーズは、4作目の『ある子ども』で完結します。物語の舞台は、1作目の主人公ジョナスが暮らしていたコミュニティ。主人公クレアは、14歳で「出産母」という職業に任命され、男の子を出産します。実はこの子は、ジョナスと共にコミュニティから命がけの大脱走をした、ゲイブだったのです。コミュニティの規則に基づき、クレアとゲイブは引き離されてしまいますが、クレアの我が子への想いは日に日に強くなるばかり。クレアはゲイブとの再会を目指して、コミュニティを超えた過酷な旅に身を投じていきます。

続いて、読書会に参加したみなさんの感想をご紹介します。

- 『メッセンジャー』の森の中のシーンは、ハラハラドキドキした。『ある子ども』では、ハーブなどの自然のものを使って身体を治すというのが細部に出ていて、すごいと感じた。人の不幸を食い物にするのは、いつの時代でもあること。でも、危険な崖を乗り越えてまでゲイブに会いたいと思うクレアに感動した。
- 森そのものの悪意がひしひしと伝わるシーンは、怖さを感じた。この悪意とは何なんだろう？『ある子ども』では、1作目の世界がクレアの体験として浮かび上がってきた。クレアの、生きていくための力強さ、感情の大きさ、愛の深さが、物語の芯になっていると感じた。
- マティに感情移入てしまい、彼の生きる意味を考えてしまった。クレアが

ゲイブに再会するためのトレーニングは過酷で、その後の場面がより強調されているようだった。悪に打ち勝つ力は、特殊なものではない。人々が悪に疑問を持った時点で、それが打ち勝つ力になるんだと思う。

- 現在の問題と、つながっていると感じるものがあった。こういう本を読むことで、物事を整理して考えることができるようなってきた。
- 時間切れで4作目の途中までしか読めていないが、続きを読む気になり悶々としている。飛ばし読みをしようと思っても面白いのでさせてくれない。3作目を読み終わった時点で、とてもモヤモヤしたので、4作目が出てくれてよかったと思う。
- 3作目では、コミュニティ内での悪意とも思わないような小さな問題が、だんだん大きくなっていく。物語の始まりが明るかつただけに、一層不気味さが増した。4作目では、クレアが少女から母親へ立場を変え成長していくのがリアル。ジョナスがゲイブを一人で最後の対決へ送り出したことが、ハッピーエンドにつながったのかも。
- 3作目が一番好き。マティが、他者のために自分の力を全て注ぎ込んでしまう展開は驚いたけど、森の木々が意思を持つて描かれる世界は、頭の中ですんなり映像化された。『ある子ども』では、自分の産んだ子どもに会いたいと思うクレアの気持ちが強く響いてきた。クレア目線でお話に入り込み、あっという間に読了した。
- 前作のキャラクターに出会えたのが嬉しかった。今までの物語が徐々につながり、きっちり終わった印象がある。目の前の悪が倒れたとしても、社会の構造・ルール・そこに暮らす人々が変わらなければ、めでたしめでたし、にはならない。読者に、「これからどうするのか？」と突き付けているような気がする。

次回 3月14日（木）10:00～11:30 オーテピア4階集会室

□『深く、深く掘りすすめ！ちきゅう 世界にほこる地球深部探査船の秘密』

山本省三／著 くもん出版